

## 小林多喜二の初期小説

— 有島武郎からの影響を受けて —

尾 西 康 充

### 一

「伊藤整、小林多喜二、中野重治、佐多稲子、武田麟太郎、本庄陸男ら、大正一一年から一四年までに二〇歳を迎えていた作家予備軍が昭和の文学者になって行くコース」を調べていた曾根博義氏は、「今日では探すのが大変な群小投書雑誌」の一つである「小説倶楽部」を読んでいる間に、小林多喜二の全集未収録作品「老いた体操教師」を発見した<sup>(1)</sup>。吉田絃二郎によって選外佳作第一席に選ばれたこの小説は、多喜二が執筆した小説のなかで最も早い時期の作品であったために、曾根氏の発見は大いに脚光を浴びた。曾根氏によれば、「小説倶楽部」は「どのような性格の雑誌であり、いつからいつまで続いたのかは突き止められていない」が「廃刊間際に山田清三郎が編集にかかわったりしたこともある」、多少労働文学的傾向は見られるものの、全体として大衆的な、胡散臭い雑誌」であったことから、「小林多喜二の同誌への度重なる投稿や、同誌に掲載された『龍介と乞食』などの小説の軽視」を招いていたという<sup>(2)</sup>。

ところで、これまで商業雑誌に発表された小林多喜二の最初の小説は『小説倶楽部』大正十一年三月号に掲載された「龍介と乞食」

だとされてきたが、このたびの発掘により、「老いた体操教師」の方が五か月早いことがわかった。『小説倶楽部』の懸賞小説に応募した作品は、残念ながらこの二作以外に、活字でも原稿でも残っていないが、現全集のように、小林多喜二の「小説」を「健」（『新興文学』大正十二年一月号）以後の小説とし、それ以前を「初期文集」として習作扱いする根拠は乏しい。むしろ、多少表現に稚拙な箇所があるとはいえ、「老いた体操教師」と「龍介と乞食」は、内容においても形式においても、「健」などよりはるかに、人間としての、また小説家としての小林多喜二の豊かさや幅の広さを存分に示した、すぐれた小説ではないかと思われる<sup>(3)</sup>。

曾根氏によれば、「老いた体操教師」は作家多喜二にとって最も早い時期に発表された小説であっただけでなく、五か月後に「小説倶楽部」に掲載された「龍介と乞食」と合わせて「人間としての、また小説家としての小林多喜二の豊かさや幅の広さを存分に示した、すぐれた小説」であるため、これらを『初期文集』として習作扱いする根拠は乏しいとする。新日本出版社から刊行された『定本小林多喜二全集』（一九六八年）および現行版『小林多喜二全集』（一九八二年）のいずれも第一巻巻頭には「健」（『新興文学』、一九二三年一月）がおかれているが、

現行版全集の編集に携わった大田努氏によれば、多喜二自身が「新人紹介欄 略歴と作品その他」（『読売新聞』、一九二九年一月五日）のなかで「健」を「自己の作品履歴の出発点」として示したことを根拠に「多喜二の投稿時代の到達点に位置する作品の一つ」であると考えたという<sup>(4)</sup>。また手塚英孝氏の実証的な多喜二研究に協力した宮本阿伎氏は、曾根氏の見解に対して多喜二の「文学的成長の軌跡は一直線ではなく、振幅はむしろ大きかった」とし、「微視から巨視、巨視から微視へ」と往復しながら「階級闘争の直面する課題を主題とする、日本の小説の未踏の分野に挑戦し、その途上で生と文学を奪われた」と考えるという<sup>(5)</sup>。作家として出発した時期の作品を考察するには、一連の試行錯誤を経て創作のモチーフが焦点化され、描写手法が個性化されていたプロセスを総合的にとらえることが必要で、多喜二の場合は自己と他者との関係から創作主体を形成し、人間を疎外する社会の仕組みを明らかにしながら国家の治安体制を批判するという文学のスタイルが次第に確立されていたのである。

多喜二は白樺派の人道主義、とりわけ志賀直哉のリアリズムの手法に共鳴して成長した作家であることが知られているが、有島武郎の「小さき者へ」（『新潮』、一九一八年二月）や『生まれ出づる悩み』（有島武郎著作集第六輯、一九一八年九月、叢文閣）を愛読し、庁立小樽商業学校の卒業を前にして創刊された回覧個人雑誌には「生まれ出づる子ら」というタイトルがつけられ、小樽高等商業学校に入学した後にも第三集まで制作された。伊豆利彦氏によれば、庁立校友会誌「尊商」第三号（一九二〇年三月）に発表された「電燈の下で」は「有島武郎の影響が濃厚な小品」であり、そこでは有島の作品を「そっくりそのまま模倣したような文体」が使われているとする一方、有島が「あらゆる貧苦にも屈せ

ず、運命にうちかって、ひたすら自分の絵を追求する青年のたくましさや賛美」したのに対して、多喜二は「運命におしつぶされ、ねじまげられる少年の悲惨な運命に同情し、慰藉とはげましを与えている」という<sup>(6)</sup>。さらに伊豆氏は「多喜二文学の根底には深い屈辱感」があり、多喜二の文学は「この屈辱感からの脱出を企てる努力のなかに発展」したと指摘する<sup>(7)</sup>。実は今回発見された「老いた体操教師」にもこれと同じような傾向が見られ、主人公体操教師の丁先生は満州に出征中に腰に銃弾を受けて退役した元軍曹として設定され、「学校で若い生徒に号令をかけているときは、華やかな軍人に帰ったような快楽を味わう」が「みすばらしいすすけた三軒長屋」に帰ると乱雑な家庭に「全く如何にもみにくい自分を意識」させられる。自分に寛容な態度で接してくれていた校長が突然転任することが決まると「生きるためだ、仕方がない……」と思って「如何にも卑劣なこと」をおこなう決意をした結果、それまでは「一番愛嬌」のある似顔絵を描いてもらって「生徒と他愛もなく騒ぐ」ような「生徒の味方」の教師であったのに、「容赦なく生徒のあらを探し、どしどしそれ等を罪」するようになった。やがて「丁先生排斥運動」が「その町の公会堂で数十名の生徒」によっておこなわれ、一ヶ月後には解雇されてしまう。多喜二は生徒たちから排斥された横暴な体操教師も元々は彼らの「味方」とされた好人物で、この事件の背景には負傷して帰還した退役軍人が十分な生活保障を受けられずに不安を感じていたことがあったことを明らかにしている。この小説にはモデルとなった事件が存在し、一九二〇年八月に第三代校長として着任した松村明敏に対する学生の排斥運動があった。松村は体操教師の富岳丹次と組んで、初代校長黒岩義介によって種蒔かれた小樽高等商業学校のリベラルな校風を一転引き締めようとしたが、教員と生徒による反発を招いた。曾根博

義氏はT先生のモデルが富岳であったことを明らかにし、多喜二が卒業した一九二一年三月二四日の卒業式では、警官二名が待機するなか、秋田政治が「本校の現況に想ひを到れば寒心に堪えぬ」という答辞を述べていたことを突き止めた<sup>(8)</sup>。また倉田稔氏が調査した同校の職員録には、富岳は一九一七年六月に着任、「新潟県平民」と記録されていた<sup>(9)</sup>。T先生がしばしば口にした「摩天嶺」とは、日露戦争中の一九〇四年七月一七日、陸軍の第一軍第二師団(仙台)一〇、九〇〇名がロシア軍東部兵団二六、六〇〇名と激闘を演じた「摩天嶺の戦い」を指し、T先生は死傷者三五五名を出したこの戦闘で負傷したことが分かる。

小樽商業学校で実際に発生した排斥運動を作品の素材にした多喜二は温かい眼をT先生に注ぎ、自分たち生徒の側に立ってT先生を糾弾しようとするのではなく、T先生がなぜそのような行動に出たのかというプロセスを、傷痍軍人の生活の厳しさに触れながら校長に追従せざるを得なかったT先生の心理に即して説明しようとした。

T先生のように社会から疎外された人間の〈屈辱感〉を創作のモチーフにし、個人を追いつめてゆく社会の仕組みを看破した「老いた体操教師」のスタイルはこの後、作家としての基本姿勢となつて、満州事変を契機に一層強化された『『軍事的警察的反動支配』の全的把握』(荻野富士夫氏)を深め、個人を抑圧支配する治安体制に対して厳しい批判を展開するに至るのである<sup>(10)</sup>。

## 二

『生まれ出づる悩み』は北海道岩内の漁夫で、後年画家として大成した木田金次郎が主人公木本のモデルとされている。木本は貧しさのため

に東京での学業をあきらめて帰郷を余儀なくされる。北海道に帰郷した後は「パンのために」漁夫として「荒くれた自然の威力」と格闘する一方、芸術への情熱を抱いた青年画家として「宏大で厳かな景色」を画布に描きとる。札幌で一〇年ぶりに木本に再会した小説家「私」は、彼が筋骨たくましい漁夫の風貌に変わっていたことに驚かされると同時に、「パンの為に生活のどん底まで沈み切った十年の月日」に耐えなければならなかったことを思いやり、〈労働と芸術〉が相克し続ける「内部の葛藤の激しさ」に胸を打たれる。そして木本のように「何百万、何千万の人々が、こんな生活にその天授の特異な力を踏みしだかれて、空しく墳墓の草となつてしまつた」ことを「全く悲しい事」「全く不条理な事」と感じ、「この地球の上のそこへに君と同じ疑ひと悩みとを持つて苦しんでゐる人々の上に最上の道が開けよかしと祈る」のである。

世の中には、殊に君が少年時代を過ごした都会といふ所には、毎日々々安逸な生を食傷する程貪つて一生夢のやうに送つてゐる人もある。都会とは云ふまい。段々とさびれて行くこの岩内の小さな町にも、二三百万円の富を祖先から受嗣いで、小樽には立派な別宅を構へてそこに妾を住はせ、自分は東京のある高等な学校を兎に角も卒業して、話でもさせればそんなに愚鈍にも見えない癖に、一年中はれと云つてする仕事もなく、退屈をまぎらす為めの行楽に身を任せて、それでも使ひ切れない精力の余剰を富者の贅沢の一つである肝癪に漏らしてゐるのがある。

「都会」には、祖先から受け継いだ財産のおかげで「安逸な生を食傷する程貪つて」いる人間がいる一方、岩内にも「小樽には立派な別宅を

構へてそこに妾を住はせ」ている。「富者」がいるという。ここでは多喜二の暮らした小樽が触れられており、生まれながらにして貧富の差別があること、女性が正當な立場を得られずに生きなければならないことなどの社会の矛盾が直視されている。さらに『生まれ出づる悩み』では、漁船が猛吹雪のなかで暴風と波濤に悩まされ、漁船が転覆して生死の瀬戸際に追いつめられながらも辛うじて生還した漁夫たちの苦闘する光景が描かれている。

海の上は唯狂ひ暴れる風と雪と波ばかりだ。縦横に吹きまく風が、思ひのまゝに海をひつぱたくので、つるし上げられるやうに高まつた三角波が互に競つて取組み合ふと、取組み合つたゞけの波は忽ち真白な泡の山に變じて、その嶺が風にちぎられながら、すさまじい勢ひで目あてもなく倒れかゝる。（中略）

雪と浸水とで糊よりも滑る船板の上を君は這ふやうにして舳の方へにぢり寄り、左の手に友綱の鉄環をしつかりと握つて腰を据ゑながら、右手に磁石をかまへて、大声で船の進路を後ろに伝へる。二人の漁夫は大竿を風上になつた舷から二本突き出して動かないやうに結びつける。船の顛覆を少しなりとも防がう為めだ。君の兄上は帆綱を握つて、舵座にゐる父上の合図通りに帆の上げ下げを誤るまいと一心になつてゐる。而してその間にもしつきりなしに打ち込む浸水を急がしく汲んでは舷から捨てゝゐる。命懸けに呼びかはす互々の声は妙に上ずつて、風に半分が消されながら、それでも五人の耳には物凄くも心強くも響いて来る。

荒れ狂う海で自然の猛威と格闘する漁夫の勇ましい姿が臨場感あふれ

る筆致でとらえられ、「三角波」が白い泡沫に變じて漁船を襲う光景は、船員と漁夫が生命の危険に曝されながら「何千匹の蟻のように、白い歯をむいてくる波にもぎ取られないように」川崎船を縛りつける『蟹工船』（戦旗、一九二九年五、六月）の一場面を想起させる。漁夫たちが「命懸けに呼びかはす互々の声」は「自分等の命を『安々と』賭けなければならなかつた」蟹工船における労働の厳しさに通じ、自然に立ち向かうために一心同体となつて働く漁夫の生活を描こうとした有島に対して、多喜二は船内で発生した集団的な階級闘争に作品の主眼をおくという違いがありはしたものの、描写の迫力はどちらの作品も互いに引けをもちつた実行」（『宣言一つ』、『改造』第四卷一号、一九三二年一月）以外にはないとし、「第四階級」の労働を通じて「思想と実生活とが融合」と考へるようになるが、この場面においても、ある種畏敬の念をもつて肉体労働が描き出されていることが分かる。

『生まれ出づる悩み』では「命をなげ出さんばかりの険しい一日の労働の結果は、僅か十数分の間で他愛もなく会社の人達に処分されてしまふ」現実も暴露されている。北洋の荒海で勇ましい活躍を示した漁夫であつたにもかかわらず、彼らには「資本のない為め」に「漁獲」を「外の土地から投資された海産製造会社によって捨て値で買ひ取られる無念さ」がある。折からの「札幌にある大きなデパートメント、ストアの臨時出店」には「藁屑や新聞紙のはみ出た大きな木箱が店先きに放り出されて、広告のけぼくしい、色旗が活動小屋の前のやうに立て列べ」られ、それが「岩内中の小売商人にどれ程の打撃であるか」も案じられている。当時「内国植民地」とされた北海道においては資本主義による搾取と収奪が「内地」以上に過酷さを増しており、木本が感じたとされる「大き

な手には掴まれる」という悲痛な心境は、『蟹工船』に「殖民地に於ける資本主義侵入史」を描こうとした多喜二の文学のモチーフに直結するものであった。有島は「特異な力を埋め尽してまでも、当面の生活に没頭しなければならぬ人々に対して、私達は尊敬に近い同情をすら捧げねばならぬ悲しい人生の事実」を感じると記したが、多喜二も自分と同じように画才のある青年が作品の主人公であったことに興味を抱いただけではなく、北海道の雄大な自然を描く画家であると同時に厳しい自然と格闘する漁夫である木本の姿に共感を覚え、さらに資本主義による搾取と収奪に対して有島と同じ憤りを感じるによって、自己の創作の土壌を形成したと考えられる。

### 三

庁立小樽商業学校および小樽高等商業学校在学時に多喜二が創作した初期小説を考察するにあたって、創作以前には疑いもなく直接的にとらえられていた自己の存在に懐疑の眼が向けられはじめ、他者の介在を発見することを通じて作家が自己の認識を深めたプロセスを分析したい。具体的には、まず「継祖母のこと」（小樽高商「校友会々誌」第二十八号、一九三三年三月）と「藪人」（新興文学、一九三三年七月）を取りあげて、多喜二が自己の存在に対して根本的な懐疑を抱きかけになった〈原罪〉について、つぎに「龍介と乞食」（小説倶楽部、一九二一年一〇月）と「ある役割」（校友会々誌 第三二号、一九二四年三月）を取りあげて、多喜二が創作のモチーフをつかんだプロセスについて明らかにしようとする。

「継祖母のこと」は主人公健が七歳のとき、早く夫を失って村に戻っ

ていた「二十七位」の若いお仙が祖父と再婚し、自分の子どもができたことから生じた悲劇が語られている。お仙の胸中で〈矛盾する感情〉が作品のテーマとされ、前妻の子のお菊や孫の健と順二を重んじる気持ちと実子彌吾を大切にする気持ちとの〈矛盾〉を描いている。

いつであったか、私と祖母の彌吾とが喧嘩をした。私たちのそばで私の母が洗濯をしていた。勿論彌吾は私の敵ではなかった。彌吾は泣き出しそうだった。母は知らん振りをしていた。それを祖母が縁側から見ている。祖母には、その喧嘩をやめさせようもしない私の母の心が分った。祖母は出てくると、いきなり彌吾をつづけ様になぐりつけた。彌吾は叫声をたてた。祖母の眼からは彌吾をなぐりながらも涙が出てきた。そして、そのまま袖をグングンとひっぱって家の中に入れた。誰もいない室に入ってきたとき、祖母はそのままひとりで彌吾をだきしめて、泣いた。……私はこの話は母から聞いたのだった。

右の場面では、後妻という立場の弱さに苦しめられるお仙の姿が描かれている。この話を聞いた健は母に対して「あまりに継母と云ったものは悲惨だ」と思い、「継母がわるいのではなくて、周囲の方が……」と「皮肉」まじりにいうと、母は「そうではない両方が悪いからだ」と反論し、が良くても、それは各々その方向を異にしているからだ」と然し、いつもその結果の尻ぬぐいはやっぱり継母という闖入者が（闖入者だから）負わなければならない」とつけ加えた。人間の関係は一元的に善者と悪者とに分けられるものではなく、価値観の相違が根本的に存するためにみな善者となったり悪者になったりするものであり、話

し合いなどでは決して解決しないのだが、祖母の場合は彼女が「闖入者」であるためにいつも「その結果の尻ぬぐい」をしなければならぬという不幸な立場にあった。このような母の説明を聞いて「どうともするこの出来ない事実を見せつけられて」黙らざるを得なくなり、健は「母や皆んなの気持ちにも正当さを認めないわけには行」かずに「その間の矛盾したギャップをどう見ていいか」分からなくなったという。

健はお仙と家族との間に生じた「矛盾したギャップ」に戸惑いを感じたが、「私の敵ではなかった」彌吾と喧嘩をはじめ、彌吾が「泣き出しそう」になるまで続け、祖母を苦しい立場に追い込んだ自分の加虐的なふるまいについては何の反省もない。さらに弟の順二と一緒に泥地で蛙などを捕らえて遊んでいたとき、順二が池に溺れてしまう事故が発生したときにも、泥沼の岸に立っていたが途中で帰っていた祖母の責任とされて、村ではお仙が順二を殺したという噂が立つ。だがそもそも自分が、池の中央近いところにまで入っていた弟に対して注意を払わず、助けを求める声がすると、たちまちその場を逃げ出して祖母を呼びにゆこうとしたのである。

「健ちゃん、助けて……!」

私はふりかえってみた。池の中央近いところに自分は首っきりの弟を見た。が、その首もすぐ見えなくなった。大きなバシバシと云う波紋が起った。私は弟の恐ろしい恨むような眼を見、ゆがめられた口を見た。

私は瞬間とびあがった。とび上った身体は反対に池の岸に私を走らした。ぬかるみを目茶苦茶に走った。ヌルヌルとした泥は、何か弟がうしろに私をひっぱっているようで、たまらなかった。

私は無意識に細い道を走った。が走ってるか、どうか私自身分からなかった。ただいくら走っても絶対的な弟の声が私をおびやかせた。叫声に追われるような恐怖のために走った。

健は自分に助けを求める弟の声を聞いてふりかえると「弟の恐ろしい恨むような眼」と「ゆがめられた口」が見えた。急いで祖母を呼びに走り出したが、いくら走っても自分に助けを求める「絶対的な弟の声」に脅かされ、「叫声に追われるような恐怖」のために走らされていたと思われた。この後すぐに祖母に向かって弟が溺れたことをいうと「今までの緊張がぐっとほぐれた」が「心が急にうつろになった」ように感じ、「このまま家へは帰れないような罪」の意識にとらわれて立ちつくした。

しばらくして祖母が帰ってきた。祖母は片方に黄色になった弟をかかえていた。私は何も云えなかった。云おうとしても唇が少しも動かなかった。祖母の眼は血走っていた。顔は青かった。涙さえ光っていた。私は何か祖母に云われそうで恐ろしかった。自分の逃げて来たことについて云われる。そういう気がした。そのことがさっきのキツイ顔を一緒に思い浮かんだ。私はふるい上った。

「とうとう死んだよ……」

祖母はただそう云った。それっきりだった。私は祖母を不審に見上げた。興奮した顔を見た。が、それ以外何もなかった。私はホッとした。が、不思議に溶解しないところが心の中にあった。

弟を助けもせずに祖母の許に走り出した健には、罪の意識が芽生えており、逃げてきたことを祖母から叱責されることを恐れていたが、祖母

は弟が息を引き取ったことをつぶやいただけであつた。祖母の胸には、家族のなかで立場の弱い自分が順二の死の責任を負わなければならないことに對する諦念があつたと思われ、健は何ら責められることなくこの場を切り抜けることができた。

だがこの事件があつた二日目の朝に突然、祖母と彌吾は姿を消す。家中騒然とするが祖母の妹が遺書を持って駆けつけると、祖母は裏庭の井戸に自殺していた。ちょうどそれは健が七歳のときに発生したできごとで、健は二〇歳のときにそれを知つたとする。健によれば「全つた平凡な自分の一家にも、そんな事件があつたか、と思うと不思議な氣」がして「悲壯と云つた氣持よりは一種の興味」を感じ「死んだ祖母に對してすまない、そうは思つても自分のそういう氣持はあざむけなかつた」という。平凡な一家にも自殺した人間がいたということに好奇心を抱いたことが正直に告白されているのだが、七歳のときのできごとの真相を二〇歳のときに知るといふタイムラグを設けることによって、祖母の自殺を知らなかつたことにするのではなく、祖母が自殺した原因になつた弟の溺死についても記憶の隅に追いやつていたことになる。溺れながら救いを求めていた弟をおいて逃げたという罪の意識は、祖母の自殺のいきさつを母から聞かされたときに再起したのであるが、それは自分の〈原罪〉というレベルにまでつき詰めて考えられることはなく、このときは自分がおかれた立場の弱さのために家族から不当な扱いをされていた祖母の境遇に對して漠然とした関心を持つだけであつた。

だが弟を犠牲にして今の生活が成り立っているという自覚は「敷入」において明確にされる。「敷入」の主人公龍介は猛吹雪のなか停車場に着くと、「黄色になつた手拭を頸に巻いていた労働者」と「貧相な四十女」の間にはさまるようにして「新しい羽織と、折目のある縞の着物を

きた小僧」が立っているのを目にする。筒砲袖から見える真白なメリヤスも鳥打帽子も足袋もすべて新調されたもので、小僧はヒモで帯に結びつけられた大きな革財布から新品の五十銭紙幣を取り出して切符を買いにいった。小僧を見ていた龍介が「急に憂鬱になつてゐる自分」を意識したのは、弟の由も敷入で眼前の小僧と同じような姿をして歸つてくるのが思い浮かんだからであつた。龍介は以前F運送店で働きたがら中学校に通つていたが、大学予科に入つて時間がなくなると自分の代わりに弟に働かせて學費を出してもらつてゐた。これまで弟は決して兄を恨むような氣持ちを持つてはいなかつたものの、龍介は「自分が安樂に学校などに通つてゐるのを、弟に對して濟まなく」思ひはじめ「自分のために弟を犠牲にしてゐる！」という意識に強迫」されるようになって、弟に對する罪を感じて自己嫌惡におちいつた。

龍介はなんとこの自我主義者だらう？ 彼は、自分の幸福のために弟を足下にふみにじつた！ そして又彼はなんとこの卑怯者だらう！ 何故なら、彼は今、その醜いエゴイズムを美しい仮面で覆いかくそうとしているから。彼はその手段によつて弟の眼をごまかそうとしている！ 活動写真とそばと、さも彼を愛しているような言葉によつて。

龍介は自分を「自我主義者」、「卑怯者」と感じてゐるが、親たちもまた「子を奉公へ出すことによつて、自分たちの生活の安易を保護しようとしてゐたではないか」と考え、「一羽の鶏と若干の餅で、赤子をだますように、まるめこもうとしている」と批判する。

龍介は明かにそういう恐るべき虚偽を「敷入」に発見した。そうでないと云えるか!? 彼は、そんな事とは夢にも知らず、あらゆる無形の踏台であることを強いられている小僧を見なければならなかった。色々の手段でまるめられている、自覚せざる搾取を強いられている小僧！ 彼は深い憂鬱にとらえられた。

龍介は「恐るべき虚偽」を「敷入」に発見し、「そんな事とは夢にも知らず、あらゆる無形の踏台」とされ、「色々の手段でまるめられている、自覚せざる搾取」を強いられている小僧を目の当たりにして「深い憂鬱」とらわれたという。弟として生まれたばかりに、兄の学資をかせぐために自己の学業を放棄して小僧として働かなければならなかった弟の立場を考える龍介には、自分がいかに高尚な学問を積んだとしてもそれは弟の犠牲にもとづいてなされたものであるという罪の意識が生まれている。実際、多喜二が小樽高等商業学校二年に進級した一九二二年、新富町五一番地の祖父慶義が経営する三星堂パンの奉公から解放されて若竹町一八番地の自宅から通学することができるようになったのは、第三吾が自分の代わりに奉公をはじめたことに関係がある。倉田稔氏は「三吾氏は余り上級学校に行きたくなかったので、この小説で弟を犠牲にしたという主張は、少しオーバーである」としながらも「敷入」のあらすじは「そっくりそのまま多喜二自身だと見ることができるといふ<sup>(1)</sup>」。さらに手塚英孝氏によって「思いがけなくとつぜん、長男を失った衝撃が、直接には、小林家の北海道移住の動機」であったと指摘されたように、上級学校に進学させようという伯父の勧めに従って秋田から小樽に単身渡って伯父の家に住むようになった兄多喜郎が急性腹膜炎によってわずか一二歳で死亡したために、多喜二の家族が小樽に移住し、多喜二は伯

父の援助を受けながら学業の道を歩むことができたのである<sup>(12)</sup>。

#### 四

自分の修得した高い教養が兄の不幸と弟の犠牲にもとづいていることを知ることによって、多喜二は自分の〈原罪〉を意識させられて激しい自己嫌悪におちいり、社会のなかで不条理な境遇におかれている人びとに対する救済を志すようになったのではないか、そしてそれが田口タキとの出会いによって決定的になったと考えられるのである。だが他面から見れば、ある人間がたとえどれほどの自己嫌悪を感じたとしても、それが直ちに社会的な不平等を糾そうとすることにつながるとは限らない。むしろ良くも悪くも現実はそのまま受け入れざるを得ないのだという諦観にもとづいて自己の立場を正当化しようとすることが多く、胸中には良心の傷痕をわずかにとどめるだけになるといえる。さらにこの良心というものがいかに脆いものなのかについては「龍介と乞食」のなかで示された通りである。

銀行に勤めている主人公龍介は、「監獄部屋」から逃亡してきた労働者を保護する母の姿を見て成長し、その影響から「ああした人を見ると堪えられない運命というものとそうした人の境遇が自己に有機的な同情を起こさせる」性格を持つ青年になった。ある日の銀行からの帰り道、友人SとKを誘ってMの下宿にゆこうとしていると「樺太の監獄部屋」から追い出されてきたという乞食に遭遇する。龍介は「何かしら恩をきせるような道徳家だという風に思われるのが堪らなく嫌」だったが、眼が見えず二〇銭しか持っていないといわれて一円札を握らせることにした。すると「神様のように自分を拝んでいる乞食を打ちのめしてやりた

い」ように思われ、さらに「そばを通り過ぎた三人ばかりの女」が「ふり返りふり返り見ては何か云い云いして笑って行った」のを見て「不快さと悔悟」、さらに自己に対する「嘲笑と屈辱」によって胸が一杯になった。しかも乞食が連れて帰ってくれと頼まれた宿屋に着くと「でっぷり肥えた、それに釣合わなく小さいくずれた丸まげをゆった血色の悪い女」が出てきて「またお前さん人様のお世話様になったんですね」といった。「ああして拜んだ皮一皮下に赤い舌」があったのかと思ひながら帰宅し、「自分を偽った乞食をのしるような心持と、ゆるそうとする氣持」に引き裂かれるのだが、「どっちみち一円の金を奪われたことに彼の心はなくて、あの極り悪い役割を演じさせたのが皆偽りから出ていたのかと思っていることであつた、なおその結果が思いも寄らないことだったのが一つ驚かした」という。そして二三日経ってからKがああ乞食を見たということを知り、「自分と同じ役割を演ずる人」の姿を思い浮かべてみるようになったのである。善意を行動に移したはずの自分が周囲の好奇の眼には偽善者として映っているのではないかと疑ひ、自分の行動が予想外の結果をもたらしたことに驚かされた。ここには母の善良な心を受け継いで行動するという自己の〈役割〉に対して、異なる解釈をする他者から与えられたと想像される〈役割〉との間にズレが発生したのである。曾根氏が『老いた体操教師』（講談社文芸文庫、二〇〇七年一〇月）の「解説」で「自己と他者を見つめる眼」というタイトルの作品解説を執筆しているように、自己と他者との交錯する視線が作品のテーマになっているといえる。これは乞食の「偽り」によって「極り悪い役割」を演じさせられたことに龍介がとりわけ恥ずかしい思いを抱いていたことを考えれば、異なる反応を示す他者によって与えられたと想像される〈役割〉のために自分が〈屈辱感〉におちいることに多喜二の関心

が向けられていたことが分かる。

このような〈役割〉という言葉が作品のタイトルに使われた「ある役割」の主人公龍介は「風采が上がらない」とコンプレックスを抱き、異性に対して自己を抑制していた。姉が出勤するときに姉と一緒にいる女学生Yを「変んにカサカサした感じ」で「若い女のもつ艶めかしさも、はち切れるような情味もない貧弱な痩せきった女」だが「話すことは一番しっかりしている」と思った。汽車通学になってからYを車内で見かけるようになって手紙を出してみると、思いがけずYと交際することができ、接吻や「抱擁」までするようになった。龍介が「有頂天」でいたところ、突然「貴方という性格の強さで私の性格がすっかり占領」されることが「恐ろしくてたまらない」と書かれた「拒絶」の手紙がYから送られてきた。龍介は女性が「アクティヴな態度」を見せるのを「心の底では望んで」いながらも同時に「憎厭」を感じ、つねに主導権を取るのには「男のなすべき事」と思い込んでいた龍介に対して、Yは拒否反応を示したのである。

初恋——それも自分からの恋ではない、相手からの恋である——その恋に於て、自分からではなく、しかもその始めて自分に恋を求めてきた相手から、クルリと背を見せられた時、龍介は決して其のことを忘れることが出来ないほど痛手を負わせられた。

龍介は自分から手紙を出して交際をはじめたのであったが、ひとたび自分の気持ちを受け入れられなくなると、女性から仕掛けられたものであったという言い訳をし、相手から求められてきた恋であったからこそ「背を見せられた時」に一層「忘れることが出来ないほど痛手」を負わ

されたとする。自分が理想とする自我と、相手から期待される役割との間にはつねにズレがあり、エゴイスティックな姿勢を捨てるためには、自我のゆき過ぎた理想化を警戒すると同時に、一方的に相手に期待を寄せることを制止することが必要とされ、お互いに自分の想像が及ばない他者の領域があることに気づかなければならない。

龍介が通う学校では外国語大会が開かれ、龍介のクラスはフランス語でメーテルリンク「青い鳥」の「森」の場面を上演することになっており、龍介は馬や山羊、野牛、兎などのキャスティングのなかから豚の役を引き受けていた。段ボール紙を使って作り鼻先を赤く塗った豚の頭をかぶって鼻を下品に鳴らすのだが、会場にYがいることを知ると「ミチルをねらう好色爺のように出来るだけ眼尻をさげ、唇のすみをゆがめて、よだれをながすような物慾しい様子」をする「醜い顔」を彼女が見て、自分が嘲られるにちがいないと思う。実際に豚のセリフは「(小さな眼を物慾しさうに、くるく動かし乍ら) わしは第一に小娘を食べたい。きつと柔くて美味だらう」という「淫蕩」な言葉であり、Yの前で性慾のままにふるまった自分が重ね合わされて一層恥ずかしく思われたのであった<sup>(19)</sup>。龍介がこのセリフを発した後、つぎのような反応が観客からあった。

「イヤなこと！」

フト、舞台の前の方にいる女の、思わずもらした言葉が龍介の耳に入った。龍介は打ちのめされたように感じた。彼のすることは余りに真にせまっている。その下品さは、若し龍介が第三者として見ているんであったならば、グッとその場を立つであろうところのものであったろう。龍介は自分自身のさっきの、その下品な姿をつき

離して客観視することが出来た。自分の姿、ミチルを抱こうとしている姿、それはある街でよく見る雄犬が雌犬にせがむあれではないか。あれを真面目に見得るものがあるか、あれを見て、無邪気な気持から笑えるものがあるか？ あれは雄犬の醜さがそのまま龍介にもって来られる。龍介はハッキリと自分自身を見ることが出来た。と、彼は今度彼をあざけっているYの顔ではなくて、真赤にしてうつつむいている顔をみた。赤くしてうつつむいている！ そしてその顔には龍介の全人格をいやしむ表情がある。彼は女の前に自分自身の全部を裸体にして見せたように思った。

龍介は女性が「思わずもらした言葉」を聞いて「打ちのめされた」ように感じた。なぜならこのとき「自分自身のさっきの、その下品な姿をつき離して客観視すること」ができ、自分が演じている「淫蕩」な豚は自分自身の「下品な姿」に他ならないと感じられたからであった。さらに思いがけず「彼をあざけっている」Yの顔ではなく「真赤にしてうつつむいている顔」を目撃し、そこから「龍介の全人格をいやしむ表情」を読み取ったことによって「女の前に自分自身の全部を裸体にして見せた」ように思われたという。龍介も自分の「下品さ」を恥じ入るようになっていたために、あざけりの視線を受けて動揺するのではなく、赤くなつた俯いた顔からいやしみの表情を感じ取ることができた。これまで言い訳にしてきた「つねに何かを演じている」、あるいは「何かに演じさせられている」という言い訳ではもはや逃れられない、いわば本当の自分の姿が「客観視」できるようになったのである。

と、この時光が出てきた。木の精や動物の精は逃げることになっ

ていた。龍介は前のものにつかまって楽屋に帰った。楽屋に帰ったとき、彼は全く、それは全く徹底的にふみにじられたことを感じた。そういう踏みにじられたものの惨めさをしっかりと自覚した。そして真暗な自分の教室に入った時、うつぶすように打ち倒れた。その拍子に、彼の頭で豚の頭がメリメリとこわれた。

このときそれまでの自分が「全く徹底的にふみにじられた」ことを感じただけではなく、「踏みにじられたものの惨めさをしっかりと自覚」した龍介は「真暗な自分の教室」に入って「打ち倒れ」た拍子に、自分の頭で「豚の頭」をこわしてしまふ。自己の存在の根底にあるものと通じ合うことを見いだすことによって、踏みにじられた境遇で生きている人間の「屈辱感」と「惨めさ」を認識できる可能性が生まれた。これは龍介がそれまで演じてきた役割、あるいは演じさせられてきた役割を捨て、「第三者」の立場から自分を「客観視」することを通じて真の主体を形成するきっかけをつかんだことを意味している。伊藤整の『若い詩人の肖像』（一九五六年八月、新潮社）では、小樽高等商業学校で毎年決まっておこなわれる外国語劇で、多喜二たちフランス語履修生が「青い鳥」の「森の場」を上演し、多喜二は「山羊の大きな首を帽子のように」かぶって登場したとされ、整にとつて「それまで同じ学校にいて、全く物を言い合うことのなかった小林と私は、楽屋や舞台裏で気軽にものを言い合うようになった」という<sup>(14)</sup>。多喜二は実際に演じた山羊ではなく、性慾をむき出しにして少女を襲おうとする豚の役を龍介に演じさせ、女性から辱めを受けることを通じて、「第三者」の立場から自分を「客観視」する、いわば想像的な自我を〈去勢〉して主体を形成させることができたのである。

## 五

龍介は女学校では『少女画報』が一番多く読まれ、『婦人公論』とか『女性』なんて二、三人よりいい」と女学生から教えられ、「『出家とその弟子』などを風呂敷にも包まずに見せびらかして持って通学している女学生」に「極端な憎悪」が感じられていたのに、龍介がYに惹かれたのは、「話すことは一番しっかりしている」と思ったからであった。あるとき龍介が古本屋で経済の本を探していたとき、店内で「ストリンデルヒの赤い部屋」や「チェホフの桜の園」を探している彼女を見た。彼女と一緒に来ていた女性が店員に「まだ有島さんの星座が出ない？」と聞くと、龍介は自分の友人に「キザな女だなあ……」といったことがあった。

『星座』（有島武郎著作集第一四輯、一九三二年五月、叢文閣）のなかで、札幌農学校に通う主人公星野清逸は上京して大学への進学を志すが、「アイヌと、熊と、樺戸監獄の脱獄囚との隠れ家だとされてゐる」千歳の山にある貧しい実家に帰ると、妹おせいが小樽での女中奉公を余儀なくされ弟純次が孵化場で重労働を強いられることに直面し、自分が「学問をするために牽起される近親の不幸」が感じられる。清逸はおせいに対して「彼女は我が一家の犠牲なり」という罪の意識を感じ、純次からは「清逸一人が都会に出て、手足にあかきれ一つ切らず、樂をしながら出世する、その犠牲になつてゐるのだといふ素振りを、彼れは機会ある毎に言葉にも動作にも現は」されるようになった。実はすでに肺病にかかっており学業を断念することを迫られるのだが、たとえ崇高なものに見えてはいても、大切な弟妹を犠牲にしてなされるのであれ

ば、自分の学問には意味があるのだろうかという疑念が自然に浮かんたのであった。

清逸たちの学生仲間には札幌で「開拓使時分に下級官吏の住居として建てられた四戸の棟割長屋」に住みながら「貧民小学校の教師」をしていた。三隅ぬいはい四歳のときに父が脊髄結核のために死亡し貧民区に住んでいるのだが、父が「頓死」したという電報を受け取った園は帰京する前に、自分にとって「神聖な存在」である彼女に「深い愛と親しみ」をもって求婚するという「嘗て知らなかった大きな事業」をおこなう。このように自分の〈原罪〉を見いだすことや境遇のちがう女性に手をさしのべることなど、『星座』には多喜二が自己の文学のモチーフに発展させる大切な要素が含まれていたことが分かる。

清逸の学生仲間の一人で「敲き大工の息子」渡瀬は、活動写真機の研究をしている新井田の後妻になっている夫人と密かに交際している。「苦界」から抜けた婦人に対して「どたん場で背負投げを喰はない用心」をしながら、酒の飲めない夫人に飲まそうとして二人の会話が空転する。同じセリフが繰り返されると同じ数字の列が無限に繰り返される「循環小数」のたとえを使って、渡瀬は二人の会話を「循環小数見たいですね」と表現した。この言葉は多喜二の「最後のもの」（『創作月刊』、一九二八年二月）のなかで、輸出青豌豆の手撰工場で働く主人公お恵が、流行性感冒に感染した弟秀雄と母お仙の看病のために出勤できなくなつて、ついに「淫売」をはじめめる決心をするときに『死ぬ』『生きなければならぬ』この間を循環小数のように往き来した……<sup>(15)</sup> というセリフにも使われる。不条理な境遇が無限に続くという苦しみは、『瀧子其他』（『創作月刊』、一九二八年四月）の主人公酌婦の瀧子が「第一土台を直してかからなけアねえ、何んだって駄目さ。根本が間違ってるんだもの……」

という社会革命の志向につながってゆく。

有島がアメリカ留学時代をモデルにして創作した『首途』（『白樺』第七卷第三号、一九一六年三月）では、フィラデルフィアにあるフレンド精神病院で働く主人公の看護士が入院患者のスコット博士から「貴様はカインと一緒に永遠に咀はれた靈魂だぞ」と叱責され、自己の罪に苦しめられる姿が描かれた。抑えがたい性的衝動に嫌悪を覚えながら父との相克に苦しみ、来るべき階級闘争のなかで敗北する知識人として自己否定するに至る有島は、旧約聖書『創世記』第四章で弟アベルを殺した「カインの末裔」の一人であると感じていた。兄弟の犠牲という〈原罪〉を持つことを多喜二も認識し、「第三者」の立場から「客観視」することを通じて自己の存在の根底にある〈屈辱感〉を社会変革の志向へと転じさせたのである。

曾根氏は「老いた体操教師」のように「丁先生個人の風貌や人柄や行動を温かいまなざしでユーモラスに描いただけの小説は、後年の厳しいプロレタリア文学の戦士の眼から見れば、批判され、否定されるべき作品かもしれない」とし「他ならぬプロレタリア文学者になってからの作者自身によってまず捨てられなければならないのだろう」とする。そして「プロレタリア文学をプロレタリア文学として成り立たせたものが一体何であったかを、あらためてその成立以前に遡って考え直してみる必要がある」という問題提起をおこなった<sup>(16)</sup>。田口たきとの出会いによってプロレタリア作家としての人生を決定的にしたと考えられる多喜二の場合、プロレタリア作家として出発する直前に創作された作品には、中川成美氏が指摘したような「ナイーブなほどのセンチメントの瑞々しさ」が創作の基本におかれながら<sup>(16)</sup>、自己と他者との関係が次第に意識され、主体を確立させていったプロセスが描かれていた。そのプロ

セスを丁寧にとだるることによって創作をはじめたばかりの作家の胎動を感じることができるのである。

# 註

小林多喜二の本文は『小林多喜二全集』（新日本出版社）から引用した。

- (1) 曾根博義「投稿少年 小林多喜二—プロレタリア文学の／への逆襲」〔すばる〕、一〇〇七年七月、一八六頁
- (2) 曾根博義「解説」〔民主文学〕第五〇一号、二〇〇七年七月、六〇～六一頁
- (3) 同右、六二頁
- (4) 大田努「投稿時代の小林多喜二」〔しんぶん赤旗〕、二〇〇七年六月二五日
- (5) 宮本阿伎「小林多喜二の初期作品の意味」〔民主文学〕第五一九号、二〇〇九年一月、一八〇頁
- (6) 伊豆利彦『戦争と文学 いま、多喜二を読む』（二〇〇五年七月、本の泉社、七六頁）
- (6) 同右書、七五頁
- (8) 曾根博義「小林多喜二「老いた体操教師」の背景とモデル」〔語文〕第一二九号、二〇〇七年十二月、五二～六四頁
- (9) 倉田稔「小林多喜二伝—小林多喜二と小樽— 府商の時代、後半」〔人文研究〕第八八号、一九九四年八月、一〇八頁
- (10) 荻野富士夫『多喜二の時代から見えてくるもの—治安体制に抗して』（二〇〇九年二月、新日本出版社、一一九頁）

- (11) 倉田稔『小林多喜二伝』（二〇〇三年十二月、論創社、一六五～一六七頁）
- (12) 手塚英孝『小林多喜二』上（一九七〇年七月、新日本出版社、一七頁）
- (13) 『マーテルリンク全集』第五卷（鷺尾浩訳、一九二〇年十二月、冬夏社、一〇一頁）
- (14) 伊藤整『若い詩人の肖像』（『伊藤整全集』第六卷、一九七二年八月、一三八頁）
- (15) 曾根博義「投稿少年小林多喜二—プロレタリア文学の／への逆襲」〔すばる〕第二九巻七号、二〇〇七年七月、一九〇～一九二頁
- (16) 中川成美「小林多喜二における《大衆》—メディア・ジェンダー・ヴィジュアルリティ」（『多喜二の視点から見た身体・地域・教育』、二〇〇九年二月、小樽商大出版会、五六頁）